

3 俣野衛氏の思想

前衛美術運動としての九州派の活動を考える時、俣野氏の存在は極めて大きいと考える。俣野氏という存在がなければ、九州派は別の違った軌跡を描いたのではないかと思われる。

俣野氏はもともと詩人であり、戦前から出身地久留米の詩人の丸山豊氏や安西均氏、野田宇太郎氏と若い頃から親交があり、早く現代詩を書いて来られていた。丸山豊氏等の知的抒情派の流れを汲む詩人である。戦後、西日本新聞社に入社されたのであるが、職場を同じくされた、桜井孝身氏との偶然の出会いが、その後の九州派の運動に大きな影響を与えたのである。まことに幸運な出会いと言うべきであろう。1988年の福岡市美術館に於ける、「九州派展」の直後に書いた拙稿「九州派私記」（文芸誌「海」6号所載）に、俣野氏の九州派に於ける功績、つまり、九州派の命名、機関誌「九州派」の発刊、宣言文の起草、運営委員会の設置、現代思想の講座、会員たちによる勉強会の提案を挙げた。

数年前、俣野婦人から、旧知の詩人羽田敬二氏へ、俣野氏の遺された、蔵書で必要なものがあれば貰って欲しいという電話があったということで、ご遺宅へ伺ったことがあった。書庫には、文学、美術書は勿論のこと、哲学、思想等、多岐にわたるものが架蔵されており、俣野氏が優れた読書人であったことを改めて知り、深い敬意を抱いた。その時、九州派運動の一つの思想的中核であった、俣野氏の蔵書目録を作ることによって、その思想形成の手掛かりとし、それが九州派の運動と如何に関わり合っていたかを探りたいと思ったのであった。その後、そのことを九州派に関心を持つ若い作家に話した所、自分が目録を作りたいと言ったので、喜んでいて、どういう事情か知らないが、実現せずに終わってしまった。俣野夫人は、聞く所によると、老人専門の施設に入られたとのことである。筆者は、俣野氏の蔵書がその後どの様になったかは関知しないので分からないが、蔵書が散逸してしまっていれば、残念なことである。

俣野氏は生前、「夢幻彷徨」という一冊の詩集を遺されているが、詩集だけからでは、氏の思想を窺い知ることは難しいと思われる。俣野氏は九州派時代、詩人リルケをよく語られ、サルトルの実存主義に関心を持たれていた。晩年、カトリックに入信されたと聞いている。また、夫人のお話では、晩年、中国旅行に行かれたそうであるが、若い日の中国戦線での苦難の追体験の旅であったであろうか。それとも、達筆で書にも造詣の深い氏の中国文化景慕の旅であったらうか。

なお、俣野氏は九州派時代、何時か、小説「九州派」を書きたい、主人公は桜井孝身であると言われたことがあった。十数年前、1,2度是非、小説「九州派」を書いていただきたいと手紙を書いたが返事を貰えなかった。これには、ある事情が介在していると推測はされるが、ライフワークとして、是非書いて欲しかったと今も思っている。